



# なごや「聖歌」だより6月号2012

## 伝統って何？

\* 正教礼拝の伝統を考える



### 今月の予定

**聖歌練習** 半田 6月6日(水)12時ごろから

名古屋6月10日代式後。毎聖体礼儀後のミニ練習は行います。

**名古屋指揮当番**

3日エレナ広石 24日マリア松島

## 2. 礼拝——リトウルギア、共働の祈り

正教会の聖堂に初めて入られた方がまず驚くのは「教会なのに椅子がない」ことでしょう。カトリックやプロテスタントの教会なら、ずらりと並んだ長椅子がまず目に入ります。もちろんお年寄りや体の悪い方のために椅子はいくつか用意してありますが、基本的に立って祈ります。「立つ」姿勢は、よみがえりの姿勢、主との出会いの姿勢、祝祭の祈りの姿勢、積極的な礼拝参加の姿勢です。第1回ニケア公会議の決定には「主日と五旬祭期（復活祭から五旬祭）には立って祈りなさい」という条項（20条）があります。

正教会の礼拝は動く礼拝です。聖職者が至聖所と聖所の間を行き来し、信徒もろうソクを献じたり、イコンに接吻したり、大きく十字を描いて腰を屈め、時には床に伏拝（土下座）したり、と思ひ思いに動きます。礼拝の要所で司祭は会衆に向き返し、

お辞儀し、会衆はお辞儀を返し、「衆人に平安（皆に平安があるように）」と祝福が与えられれば、「爾の神<sup>o</sup>にも（あなたの霊にも）」と返します。輔祭は聖堂内をまわって香炉を振り、人々は通路を空け、頭を下げます。主教祈祷ではさらに動きが複雑になります。

人の動きだけでなく、声も立体的に動きます。輔祭は王門の外で祈願を唱え、聖歌隊（会衆）は祈願のたびに「主憐れめよ」「主賜えよ」と答え、至聖所の司祭が祝文（祈りのことば）を唱え、聖歌隊（会衆）が「アミン」と答えます。聖歌隊の本来の立ち位置はイコノスタスの前の左右両脇（クリロス）です。日本ではあまり見かけませんが、左右に分かれて掛け合いで歌います。これは「アンティ・フォン」声vs声という歌い方で、起源は旧約時代にさかのぼり、ビザンティンで市中行列として発達し、ミラノのアンプロシウスによって西方にも紹介されアンティフォナ（交唱）となりました。

## バルコニー

帝政時代のロシア教会の流れをくむ聖堂では、聖歌隊が後方2階のバルコニーで歌うことがよくあります。これは16世紀以降に西方の影響が入ってきてから始まった習慣です。西方ではルネサンス以降、教会美術や聖歌に対する考え方が大きく変わり、独自の発展が進みました。絵画は人間主義となり教会音楽は単声から多声へと発展しました。

正教会の本来の考え方では、聖歌は礼拝の一部で、聖歌者の立ち位置はイコノスタスの手前の両脇です。聖歌者は特別に祝福を受けた「教衆（クリロス）」と呼ばれる人たちで、聖歌は至聖所と聖所をつなぎ、聖職者と会衆をつなぐ役目を果たしていました。

聖歌者がリードし、会衆は子供の時から知っている歌、たとえば連祷、聖変化、天主経などを声を合わせて歌いました。

聖歌が単声から複雑な多声合唱になり、誰でも歌えるものでなくなりました。さらに聖歌隊がクリロスか

らバルコニーに上がると、聖歌はますます会衆から遠ざかり、人々は礼拝の積極的な参加者から、消極的、受動的な「お客さん」へと変わってゆきました。皮肉な言い方をすれば、会衆参加を犠牲にした分だけ、ロシア正教会は比類のない美しい合唱聖歌を発展させたとも言えます。

美しい合唱聖歌、そして祈りの聖歌、両方の伝統を考えてゆかねばなりません。

— 「祈りの音楽」 ウラディミル・モロザン  
2005年大阪教会での講演から



17世紀、バルコニーが取り入れられ始めた頃の聖歌隊

# 知って祈ろう—奉神礼は面白い

エウハリスティア

感謝の祈り—アナフォラ・聖変化 (3月号からの続き)

## —エピクリシス—

爾の賜を、爾の諸僕より、衆のため一切のために爾に献りて、

あなたに頂いたものを、あなたの僕から、すべての人のため、すべてのもののために、あなたに捧げます。

くすべてはあなたからいただいたもの、わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません (1歴代誌 29:14) >

主や、爾を崇め歌い、爾を讃め揚げ、爾に感謝し、我が神や爾に禱る、

主よ、あなたを崇め歌い、あなたを讃美し、あなたに感謝し、私の神よ、あなたに祈ります。

第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣わしし至善の主や、之を我等より取り上げるることなかれ、なお我等爾に祈る者のうちに之を新たにせよ、

(句) 神や、潔き心を我に造り、正しき霊を我の衷に改め給へ、

第三時に…

(句) 我を爾の顔より逐うこと勿れ、爾の聖神を我より取り上げる こと勿れ、

第三時に…

(五旬祭の日) あなたの聖神を第3時(朝9時頃)に、使徒に使わされた最も善き主よ、これを私から取り上げないでください。私たち、あなたに祈る者たちの間に、これを新たにしてください。

パン

この餅をもって、爾のハリストスの尊体と成し、

「アミン」

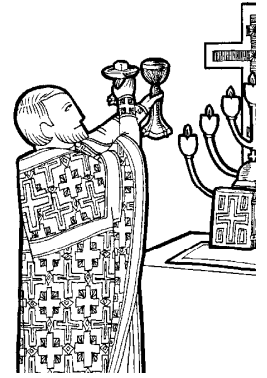
この爵(杯)中のものをもって、爾のハリストスの尊血と成し、

「アミン」

爾の聖神をもってこれを変化せよ、

「アミン」「アミン」「アミン」

わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか (1コリント 10:16) 「アミン」は「そうです」「そうなりますように」という合意のことばです。教会全体が祈って初めて、この祈りが完成されます。



「エピクリシス」とは、聖神を降してくださいと願う祈りです。

かつて西方教会と東方教会では、どのタイミングで聖変化が起こるかという論争があり、西方の「取りて食らえ」という制定句に対し、東方では「爾の聖神を以てこれを変化せよ」というエピクレシスのことばとする誤った理解が広まりました。

シュメーマン神父は語ります。正教会では「聖体礼儀は全体が一つの機密として、聖祭品の準備と人々が教会として集まることによって開始される。集まり、聖入とみことばの宣言があり、奉献が行われ、感謝の祭品が宝座の上に置かれる。平和の接吻と信仰告白の次にアナフォラが開始され感謝と記憶の祈りの内に祭品が上げられる。アナフォラは「エピクリシス」で結ばれる。すなわち神が聖神を遣わし、私たちの捧げものであるパンとぶどう酒をキリストのからだと血として示し、私たちをそれを領けるにふさわしくしてくれるように祈る」(ユーカリストP309)

「聖体礼儀」全体が、人間の知恵を超えた奇跡なのです。「どこで変化するか」などという分析は、知る必要のないことまで知ろうとする人間の傲慢さではないでしょうか。

## ??正教会トリビア??

### 第〇時+6=今の時間



「第三時に～」と唱えられますが、第三時は今の朝9時頃です。ちなみに第一時は朝の7時頃、第六時は正午。第九時は午後3時頃となります。

ユダヤ教の一日は夕方から始まるので、第〇時に6時間を足すと今の時間になります。ということは三時課は朝9時頃の祈り、六時課は12時頃の祈りということになります。第3時には聖神が降ったこと(使徒行実2章)、第6時はハリストスが十字架に釘つけられたこと、第9時には息を引き取ったことが記憶されます。

参考文献

『奉神礼』『教義』トマス・ホブコ著、西日本主教教区発行(教義は未発行)  
『ユーカリスト』A.シュメーマン著、新教出版社

## ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料